

創説『旧時報鐘楼物語』

【1幕】

この物語の主人公「旧時報鐘楼」は伊勢崎駅の南「赤石楽舎」と共に建っています。

私たちを、ずう〜っと見守り続け、もうじき 100 歳を迎えようとしています。群馬県内で一番古い鉄筋コンクリートづくりの建物なのです。一時は「老朽化して危険!」と取り壊しの危機もありました。しかし、その歴史的大切さから「伊勢崎市重要文化財」となっています。この時報鐘楼にどんな思い出話があるのか、みんなで探検の旅に出かけましょう。



【2幕】

ところでみんなは「時報鐘楼」ってなんだかわかりますか？

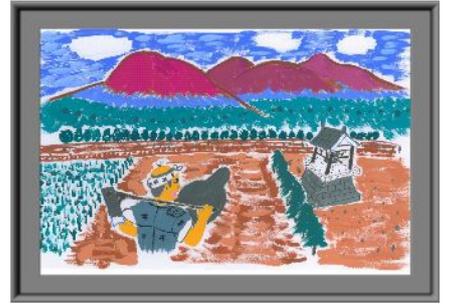
時報は、「時刻を知らせること。」そして鐘楼は「鐘をつき鳴らすところ」というものです。「鐘をつきならすところ」と言えば 12 月の大晦日から新年の元日にかけて撞きならす「除夜の鐘」が有名ですね。

でも「そんなこと時計の役目じゃないか」とみんな思っていますよね。ところが、江戸や明治、大正時代には時計は舶来品でとても高価なものでした。普通の家には時計なんて無かったのです。

そこで、まちなかのお寺の鐘を朝 6 時と夕方 6 時の 2 回、和尚さんがついて、それが時刻の目安となっていました。

じゃあ、みんなの好きな給食の時間「お昼」はどうしていたのでしょうか。伊勢崎あたりのお百姓さんは畑での仕事で、自分の影が赤城山の荒山、長七郎、黒檜山などを指すと「もうすぐ昼だ、さっさと家に帰って飯にすんべ〜」といった具合でした。

舶来品：外国から輸入した物



【3幕】

江戸時代中頃の（享保 12 年（1727 年））伊勢崎藩のお殿様、酒井忠告（ただつぐ）は、「時間は大切である」と中台寺に特別にお金を払って鐘をきちんとつくように命じました。

それが伊勢崎の時報の始まりだったと考えられています。他の寺でも鐘をついていましたが、住職の用事や都合の悪い時は、鐘をつかなかったり、時刻をずらしてついていたようです。

それでは朝飯や夕飯がずれて困りますね。でも、お寺の都合でついているので、いつもと違う時間だからと言って誰も文句は言わなかったのです。

中台寺：当時、地理的に伊勢崎のほぼ中央に位置していた。



【4幕】

明治も末になると役場の仕事や全国に広がる商売、海外との貿易など人々の生活がとても忙しくなってきました。

約束した時間になっても相手が姿を見せず 1 時間も 2 時間も待つようでは次の約束に間に合わなくなってしまう。みんなとても困っていました。

いっぽう江戸時代も終わり頃（弘化 3 年（1846 年））伊勢崎の西町に板垣啓造という男の子が生まれました。後に母方の小林家に養子として入り

「小林桂助（初代）」となりました。小林家は「薬種商」といって薬を扱う商売をしていました。

桂助は幼いときから薬や商売の仕組みについて沢山勉強をしました。

二十歳になると開港したばかりの横浜（本町 5 丁目）に丁稚奉公として岐阜伊助の店に住み込みで働き始めました。



桂助は伊勢崎で薬の勉強をしていたので、当時まだあまり知られていなかった「薄荷」に目をつけフランス、ドイツ、イギリスなどと貿易をするようになりました。世の中の先を見据える目と勤勉さから商売はだんだんと大きくなり、信用を得ていきました。そしてヨーロッパでは「KOBAYASHI」といえば薄荷のこと」というほどになりました。

丁稚：江戸時代から第二次世界大戦終結まで行われた商店主育成制度

【5幕】

時を同じくして、埼玉は深谷出身の渋沢栄一という、とても利口で行動力のある人がいました。栄一は江戸幕府の役人で最後の将軍徳川慶喜（よしのぶ）の命令で渡欧使節団の一員として、パリ万博に行くことになりました。

桂助も世界中の動きに興味があったので仕事のかたわらパリ万博に行き世界の新しいものを見聞きすることに期待をふくらませ旅立ちました。当時は海外に出る日本人はとても少なかったので桂助は日本の使節団と挨拶を交わしました。それが栄一と桂助の最初の出会いのきっかけとなったようです。

渋沢栄一：後に第一国立銀行設立に係り初代頭取となった人です。

渡欧使節団：ヨーロッパの仕組みを調査したり日本を紹介したりした。

パリ万博：1855,1867,1889,1900 に関かれ桂助と栄一の出会いは第2回(1867)であったと考えられます。



【6幕】

二人の故郷が伊勢崎と深谷、隣同士であったこともあり、すぐに打ち解け度々会う機会に恵まれました。栄一が六歳年上で商売や経済に詳しく桂助の良き相談相手でもありました。横浜に暮らす二人は忙しい中、互いに都合をつけ当時憧れの建物、浅草凌雲閣で西洋文化の象徴であるコーヒーを飲みながら、眼下に広がる東京の街並みやはるか北の故郷に思いをはせ栄一の「道徳経済合一主義」や社会貢献などの話に花を咲かせていました。

浅草凌雲閣（りょううんかく）：現在の六本木ヒルズやスカイツリー

※道徳経済合一主義「道徳と経済とは両者共に進めていくもので、生産殖利の経済は仁義道徳によって発展し得られるもの、又、仁義道徳の人道は経済によって拡大するものである。」



【7幕】

桂助は商売で得たお金を自分だけのものとせず「生まれ育った故郷、伊勢崎のために役立てよう。伊勢崎にも凌雲閣やエッフェル塔のような心のよりどころとなる立派な建物を造りたい。」と考えるようになりました。

桂助は度々伊勢崎に寄付をしていました。

・明治中頃コレラが流行した時には薬代（石炭酸）として10円（およそ20万円）

・昭和3年自社の開業45周年記念として奨学金1千円（およそ2千万円）など

エッフェル塔：1889年（明治22.3）に完成。



【8幕】

1912年7月30日、明治天皇が御崩御し、45年の明治に幕が引かれました。日清、日露、第1次世界大戦で国内景気が異常な盛り上がりの中、大正天皇の御大典を迎えました。戦争特需の中、国民は御大典を熱狂的に祝いました。

崩御：亡くなる

御大典：新しい天皇に変わったことを祝う祭り

大正天皇の即位が1年遅れた理由：本来であれば大正3年に行われる予定でしたが同年4月に明治天皇の皇后（昭憲皇太后）が死去したため、翌年の大正4年（1915年）11月10日となったのでした。



【9幕】

大正4年の同じ年伊勢崎町の新しい町長として石川泰三が就任しました。その頃の伊勢崎は「伊勢崎時間」と言って皆からあきれられるほど時間に曖昧でした。例えば、村の寄合や結婚式、葬式などの集まりは1～2時間遅れることが当たり前でした。

「どうせ、時間通りに行たってまだ誰もきてないに違いない・・・」と皆が思っていた為、遅れることが当たり前になっていたのです。



こまり果てた町長は、ご覧のような「宣伝ビラ」をたくさん作り町民に配ったり、町のあちこちに貼ったりして時間を守ってもらうよう努力していました。しかし、残念なことになかなか直りませんでした。



【10幕】

こまり果てた泰三は桂助に相談しました。桂助も若い時から海外と貿易などをしていたので、時間の大切さを良く知っていました。

桂助「町長、伊勢崎の政治経済の中心地に時を告げる塔を造りましょう。お世話になった故郷、伊勢崎のために私が協力しますよ。」

泰三「本当かね！小林さん。そうしてくれると町はとても助かります。」

桂助「どうせ建てるのならば以前から私が思い描いていた建物があります。町長も知っている浅草の凌雲閣です。」

「伊勢崎の町に凌雲閣を創ることは私の若い時からの夢だったのです。大正天皇の御大典と私の古希（70歳）の祝いに合わせ大正4年に完成させましょう。」

泰三「わかりました。それでは早速、設計図とお金がどれくらい必要か職員に検討させましょう。」

※大正初期の伊勢崎町の中心：当時鐘楼の周辺には伊勢崎織物組合、町役場、銀行などが集まり町の中心となっていました。



【11幕】

その結果、構造や配色は、凌雲閣と同じレンガと木で作ри、レンガの茶・塔は白・屋根は青と決まったのでした。凌雲閣は八角形、高さ5.2mですが時報鐘楼は高さ15.9mと小ぶりなため六角形の方が造りやすかったのでしょうか。

更に、フランスはパリで見たエッフェル塔のしなやかな曲線を取り入れ、より景観的に優れたデザインとなりました。

表面の化粧にレンガをイギリス積で積み、内部の骨組は鉄筋コンクリート造で塔上部へは2段のハシゴで昇る構造としました。

群馬県内初の鉄筋コンクリート造りとあって工事費用はとても莫大でした。そのすべてを桂助の寄付でまかなわれ見事に完成したのです。工事費用は2650円（およそ4千万～5千万円）



【12幕】

石川町長により大正5年1月17日小林夫妻が出席する中、華々しく「時報鐘楼建築落成式並びに撞初式（つきぞめしき）」が行われました。時報手として鈴木兼太郎（かねたろう、後に妻うた）と狩野庄八がつかめました。

以来、朝夕の6時、昼の12時の一日3回つかれ続けることとなりました。

♪ゴーン、ゴーン 鐘が鳴る 高い美空にそびえ立つ

♪わたしのまちの真ん中の あおい鐘楼の てっぺんで



♪ゴーン、ゴーン 鐘が鳴る

と親しみを込めて、子供たちに歌われました。

時報鐘楼としてつかれた鐘の音は伊勢崎警察署が移転された昭和12年10月までの、およそ22年間続き、その座をサイレンに譲ったのでした。

【13幕】

昭和18年には太平洋戦争のため金属供出で皆に親しまれた鐘は外され鉄砲の弾や兵器などに姿を変えたのでした。

時報鐘楼も昭和20年8月14日の空襲にあい、塔の部分が焼け落ち、レンガの西側表面には強い熱で焼かれた跡が今も残っています。

伊勢崎の歴史をたどると必ず出会うことが2つあります。銘仙織物と戦争の記憶（傷跡）です。

時報鐘楼の思い出にパリ万博や浅草凌雲閣、渋沢栄一、石川泰三町長、戦争の記憶と様々な思い出が浮かび上がってきました。

今そこに建っている時報鐘楼は何も話してはくれませんが、私たちが聞こうとする気持ちを抱くと、いろいろなことを教えてくれます。皆さんも当たり前のようにそこにあるものを「何でここにあるのだろう？」と考えてみてください。



最後に、私たちに歴史ある建物（モニュメント）を残してくれた小林翁と我が町のランドマークとして、そびえ立つ時報鐘楼をこれからも大切に末永く後世に伝えていくことをお願いして、この物語を終わりとします。

終わり

創説『旧時報鐘楼物語』について

● タイトルに「創説」を付け加えた意図は「創作：文学・絵画などの芸術を独創的に作り出すこと。また、その作品。「物語を～する」「説明：ある事柄が、よくわかるように述べること。」を意味する造語です。

● この物語は史実に基づき制作しましたが一部脚色されています。

① 脚色部1：渋沢栄一と小林桂介の出会い。「両名は同じ時代、業界、渡欧経験、思想を持ち深谷と伊勢崎と郷里が近いことが根拠」

② 脚色部2：旧時報鐘楼のデザインのルーツ。「小林桂介が暮らす横浜の目と鼻の先にあった浅草凌雲閣。その当時の人々にとってあこがれの的で現代のスカイツリーや六本木ヒルズ同様にランドマークであったこと。また、パリで目にしたであろうエッフェル塔に影響されたと考えた」

● 協力をしてくれた人達、参考にした書物

① 小林桂株式会社（神戸市中央区）取締役社長 西松 豊氏

① 元赤堀歴史民俗資料館館長 新船 直孝氏

② 伊勢崎歴史散歩

③ 是我一石川泰三伝一

④ その他多くの方々及びインターネット上の情報類

⑤ 明治天皇、大正天皇の写真複写元

<http://image.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E6%98%8E%E6%B2%BB%E5%A4%A9%E7%9A%87>

⑥ 浅草凌雲閣の写真複写元

<http://www.tanken.com/ryoun.html>

<http://www.12kai.com/12kai/kappat3.html>（浅草公園池畔の光景）

● 制作著作

伊勢崎市景観サポーター実行委員会

作：星野 正明、和佐田 富士江、佐藤 好彦

絵：佐藤 好彦

連絡先：090-1252-2509（佐藤）

